

## ジークリット・ダム、 チューリンゲン文学賞を受賞する

西山力也

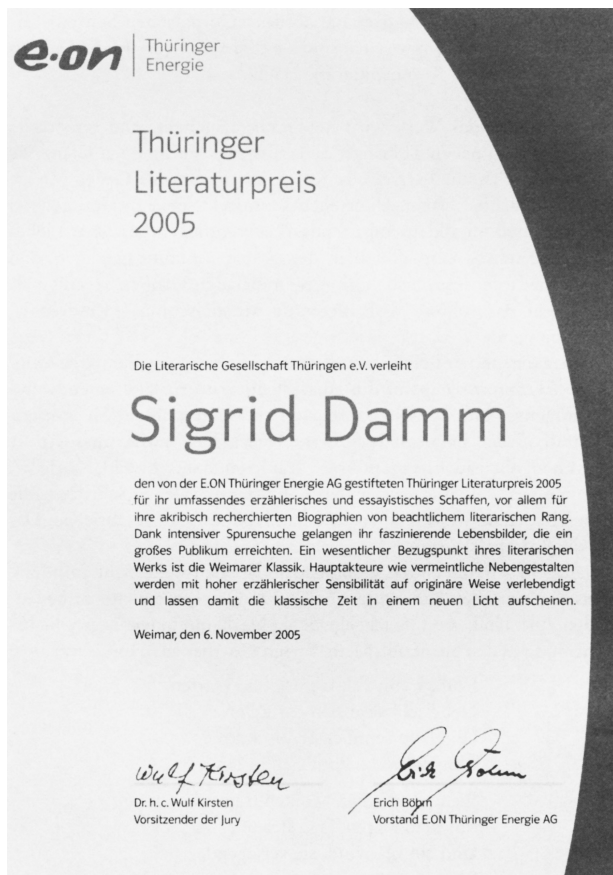
### はじめに

ジークリット・ダムが創設された「チューリンゲン文学賞 (Thüringer Literaturpreis)」の第1回受賞者となった。2005年11月6日、ヴァイマルのドイツ国立劇場大ホール、つめかけた大勢のファン。授賞式は除幕と終幕に音楽演奏が配され、華やか、盛大。来賓としてチューリンゲン州首相ディーター・アルトハウス、同州文部大臣イェンス・ゲーベル、州議会副議長ビルギット・クラウベルトも姿を見せた。本人および主催者側からの要請で私も遠路馳せ参じたのは、10年来親交を続けているダム氏に会って直接お祝いを言いたかったのは無論のこと、この新文学賞にも共感を表明したかったからである。「チューリンゲン州に欠けていたもの—それは文学賞にほかならない」、創設相成って、本日めでたく第1回授賞式が挙行されるのは、とりわけ受賞者が「チューリンゲンという特別な根っこ」を好個の対象とし、その多彩な描出により成功をおさめた作家であるうえ、チューリンゲンの出身ゆえになおさらのこと、まことに喜びに堪えない。アルトハウス首相の祝辞のこの言葉に、私もまったく同感であった。

チューリンゲン文学賞—その創設の趣旨と経緯は、司会者エーリヒ・ベームの挨拶から知ることができた。「この賞は、住居および活動の場をチューリンゲンとする作家ないしは少なくともチューリンゲンとの直接的な関係を作品に描いた作家を顕彰する。選考は2年ごと。」賞の創設は、1991年ヴァイマルに設立された社団法人チューリンゲン文芸協会 (Literarische Gesellschaft Thüringen e. V.; 略: LGT) の悲願であり、そこに株式会社E.ONチューリンゲン・エネルギー (E.ON Thüringer Energie AG.; 略: E.ON) がスポンサーを買って出て、壁の崩壊後15年余りの希望と苦難の歳月を経て、ようやく実現の運びとなったのである。E.ONは、2005年10月数社を併合してエアフルトに設立されたチューリンゲン州最大のエネルギー供給サービス会社で、現在70万の顧客に電力、天然ガス、遠隔暖房の供給を行なっている。利益追求のみではなく、青少年の育成、スポーツや文化の振興など地域社会への貢献が同社設立のコンセプトであるだけに、LGTの切望におのずと結びついたのである。「私の考えでは、エネルギーこそ人間の最初の、唯一の美德である。」ヴィルヘルム・フォン・フンボルトのこの言葉を引用しつつ、「エネルギーこそ、人間を内から動かす原動力であり、それはただ単に肉体的な創造のためのみならず、精神的創造のためにも寄与する力であり、いかなる社会においても文芸活動の基礎である」と述べる司会者エー

リヒ・ベームは、じつはE.ONの首脳の一人であり、この世の栄枯盛衰のなかにあつて作家=作品こそが永続性を有する存在であり、今に生きる私たちにはるか歴史のかなたから創造のエネルギーを供給していると言って、こう締めくくる。「文学作品は、シラーの死後200年を経たいまなお、チューリンゲンに息づいております。ヴァイマル古典文学こそ、今日なお多くの作家たちにインスピレーションを与え続けているエネルギー源であると思われるのです。」

選考委員会はLGT会長のヴルフ・キルステン博士を委員長として組織され、1998年の大著『クリスティアーネとゲーテ』<sup>1)</sup>に続いて、シラー記念年（没後200周年）の2005年に、これまた大著『シラーの生涯』<sup>2)</sup>を上梓、チューリンゲンの本質、その多彩な魅力を描ききったS・ダムに授賞を決定するのである。授賞理由にはこう書かれている（下記、賞状の写し参照）。



署名は選考委員会委員長ヴルフ・キルステン博士とE.ON代表エーリヒ・ベームの連名

キルステンより賞状が、E.ONのエーリヒ・ベームより賞金がダムに手渡されて、最後にダムの謝辞となった。この祝辞、賞賛の演説、謝辞は、それぞれがきわめて興味深いものであり、ダム文学の本質はもとよりその評価を考えるうえで貴重な示唆に富んでいるので、以下順番に章をあらためて、前者二つは要約し、最後のダムの謝辞は全訳するかたちで紹介してみたい。

「物語作家、エッセイストとしての幅広い活動、とくに氏の伝記作品が精密な調査にもとづき、注目すべき文学的水準を示している点に対して。氏は、集中的な証拠探索によって、大勢の読者の心をとらえる魅力的・実証的な伝記の創造に見事成功した。氏の文学作品が本質的にかかわっているのはヴァイマル古典期である。主人公および脇役と思われた登場人物が、物語作家としての高度な感覚と独特な手法によって生命が吹き込まれ、それによりあの古典時代が新しい光のなか映し出されている。」

ここで授賞式の全体を見ておくと、アルトハウス首相に続いてインゼル社編集長ハンス=ヨアヒム・ジムの祝辞、いわゆる賞賛の演説は著名なゲーテ学者であるケルン大学名誉教授カール・オットー・コンラディ、そのあと審査委員長ヴルフ・

ジークリット・ダム、チューリンゲン文学賞を受賞する

## I



祝辞を述べるインゼル社編集長ハンス=ヨアヒム・ジム

インゼル社編集長ハンス=ヨアヒム・ジムは、故ジークフリート・ウンゼルト<sup>3)</sup>以来、同社の社是は「伝統はしかし現在である」というテオドル・W・アドルノのテーゼであるとし、すなわち「歴史と現在を相互に生産的に関連づけること」、まさにこの点がジークリット・ダムの文学の特質と合致したのであると述べて、現在ほとんど専属出版社となった観のある同社とダムの関係、その個々の作品の出版を年代順に説明することにより、ダムの文学的展開を概観した。

まず、インゼル社がダムに注目した当初の、版權を他社から買い取ってなされた出版から話が始まる。周知のように、ダムの文壇登場は壁の崩壊のほぼ10年前、『カロリーネとの出会い—カロリーネ・シュレーゲル=シェリング書簡集』(1979)、『鳥たちは陸を知らせる』(1985)、『レンツ著作・書簡集(全3巻)』(1987)、『コルネリア・ゲーテ』(1987)など、これらの作品は、ライプツィヒやベルリンなど旧東独で出版されたものであったからである。そして東西両ドイツの再統一を経て、長編小説『私はオッティエリエではない』(1992)、散文『過剰でないこの孤独』(1995)、『クリスティアーネとゲーテ』(1998)、『ラップランド昼夜紀行日記』(2002)、『フリードリヒ・シラーの生涯』(2005)—この間、詩集や書簡の編纂やエッセー集などの精力的な出版もなされるが—へと続くのである<sup>4)</sup>。

ジム編集長の報告でひじょうに興味深かったことの一つは、作品個々のさわりの紹介は無論のこと、とりわけ、当時まだ健在であった社主ウンゼルトの、ダムを自社の作家に採り入れんとする意欲的な攻勢、そしてたちまち著者=出版者間の信頼関係を築き上げてゆくまでの、旧東独出身のこの女性作家との交渉を、手紙や電文によるやり取りから引用しつつ語ったことであった。ダムと最初に関係をもったのは1987年ライプツィヒのインゼル社<sup>5)</sup>であり、ここから『レンツ著作・書簡集(全3巻)』が出版され、1988年にはフランクフルトのインゼル社が『コルネリア・ゲーテ』の版權を東独アウフバウ社から買い取って出版、東西両ドイツ再統一前のこうした関係を経て再統一後の1990年8月22日、ダムは早くもウンゼルトに次の意向を伝えるのである。「私は執筆中の新作ならびに既刊の私の著作とともに、貴社インゼル社の作家になりたいと思います。」こうして急速に展開してゆく信頼関係、出版者ウンゼルトがダムに並々ならぬ関心を抱いていたことは、例えばドイツ再統一記念日前日に発信された長文の電報からも読み取れる。

ジークリット・ダム様、1990年10月3日を迎えるにあたって、一言申し上げずにはいられません。私たちは40年もの間、異なった歴史を歩んできましたが、生きる空間を共有できるよう

になったいま、この共有空間を、出発点とする前提条件はそれぞれ異にしながらも、ともに手を携えて、創意を凝らし、連帯のうちにも批判し合い、そして将来はヨーロッパという視野に立って、豊かな実りで充たしてゆかなければなりません。私たちの連携推進が楽しみでなりません。

あるいは、60万部というドイツでは異例のベストセラーとなった大作『クリスティアーネとゲーテ』についての逸話。「受洗証明書」に「クリスティアーナ」と書かれているので、これを厳密に採用しようとするダムに対するウンゼルトの反論。「私が問題だと思いますのは、世間は誰でもクリスティアーナ (Christiana) よりもクリスティアーネ (Christiane) のほうに馴染んでいることです。あなたはその世間に抵抗しようとお思いなのですか。」「クリスティアーナとするのか、クリスティアーネとするのか、という私の質問に、まだご回答をいただいております… (略) …受洗証明書に記載のクリスティアーナは確かに正しいとしましても、今ではすでにクリスティアーネのほうが世間に通用しております… (略) …なぜあなたがそれに抵抗なさろうとするのか、なぜクリスティアーナでなければならないのか、私は理解に苦しみます。あなたはこの受難の主人公を庇護なさろうとしておりますのに、その折角の正義もクリスティアーナを用いますと、かえって主人公の立場を不利にするだけだと、私は思うのです。」ダムは結局ウンゼルトのこの反論を受け入れ、こう記すことになる。

クリスティアーナが彼女の洗礼名であり、この洗礼名、彼女が署名に用いているこの名前が彼女の名前であり、私もクリスティアーナと呼びたいところなのだが、時代の流れと習慣から、いつの間にかクリスティアーネという表記が優勢となり、この2百年以上にわたる伝承のあいだにもはや定着してしまった観がある。習慣の力とはまこと抗し難い。(30頁)<sup>6)</sup>

出版社の編集者しか知らないこの裏話、会場はどっと笑いに包まれたのであった。

ジム編集長の報告でひじょうに興味深かったもう一つは、『私はオットーリエではない』、『過剰でないこの孤独』、『ラップランド昼夜紀行日記』そして『フリードリヒ・シラーの生涯』へと展開していくダムの創作活動の基盤を成すNatur (自然) とWanderung (自分の足で踏破すること) の意味の指摘であった。「自然ないし自然の姿は、硬直した社会、新興住宅街の殺風景な長方形の配列と対極のものであると捉えられます… (略) …自然こそ、なお存在する唯一の信頼できるものなのです。」ダムの作品において決定的な役割を演じているこの自然は、必然的に『シラーの生涯』の副題ともなっているWanderungと結びつく。この作品では、明確な肖像画が描かれるわけでも、あらかじめ設定された構想が追求されるわけでもない、ただ物語られるだけなのである、とジム編集長は指摘し、ダムの次の言葉を援用する。

書くということは、歴史のなかで失われたものと密かにコミュニケーションを交わすこと、個を取り戻すこと、記憶、直感、期待なのである。私にとって書くということをつねに大切なのは、目標への到達ではなく、目標へ向かっての旅そのものなのである… (略) …私の著作は

ジークリット・ダム、チューリンゲン文学賞を受賞する

つねに一意識し、かつそう願って—現在を映し出す鏡として考えられたものなのです。つねに私の出発点が独自の生命となっているのです。

こうしてジム編集長はダムの全著作を貫くライトモチーフは自分の足による踏破、旅、歴史的空間や尋常でない生の状況の探索、体験である、未知のもの、忘れ去られたものへの好奇心、失われたもの、追放されたものとの再会なのである、と結論する。

無論、作家としてこうした姿勢を貫くためには、それを支える確固とした信念のようなものがなくてはならない。ダムは「自分の作品がどう受容されようとも」けっして「学問的な決まりきった型」に左右されまいとする。この自主独往の態度がそれであるとジムは指摘し、次の言葉を引用する。「しきたりから自分を解放すること…(略)…私は、私の出自であるゲルマニスティクという同職組合から脱退したのです。」「自分の足で踏破すること(Wanderung)」は同時に「境界を踏み越えること(Grenzüberschreitung)」であるとして、この二つがダムの作品を特徴づけるいわば政治的スタンスである、とジムが話を展開していったとき、私はダムが文学的出発の時期に述べた作家としての自己規定を思い起こしていた。

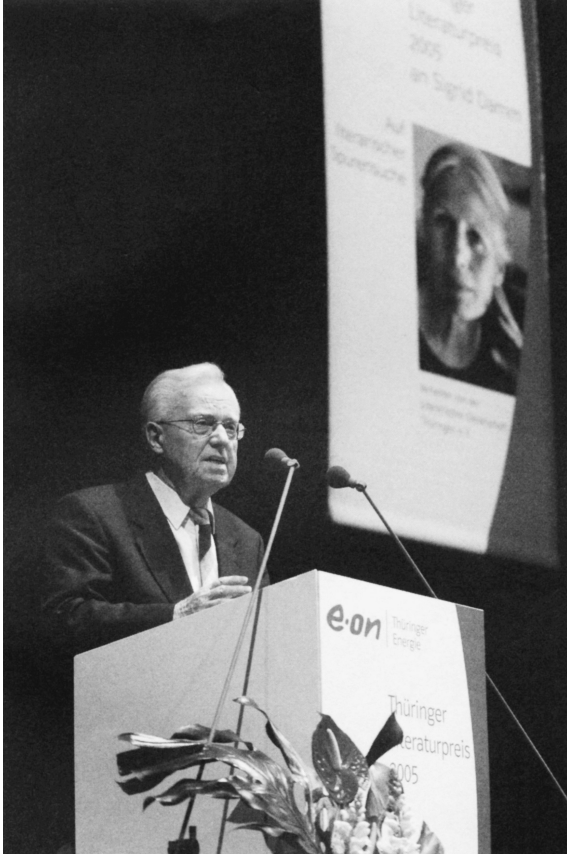
これらの作家たち(ギンター・デ・プロイン、アドルフ・ムシュク、ヴォルフガング・ヒルデスハイマー)は、リオン・フォイヒトヴァンガーのように、学問(=科学)と一線を画して、作家の側の特権を主張してはいません。逆に、彼らはこの堀を埋め立て、まだ耕作されていない土地、学問と芸術の境界領域という未開地に、彼らの新しい作物を育てたのでした。このことは私にとってきわめて重要なことでした。ドキュメントを〈主〉として、そこから導き出された、可能な限りまだ臍帯でドキュメントと繋がっているようなフィクションを〈従〉とする、事実と虚構に対する私の関係が決定されたのです。』<sup>7)</sup>

こうした姿勢は、当然、「支配的な古典作家受容」や「文学遺産なるイデオロギー」に対して斜に構えることになる。クリスティアーネ、ゲーテ、シラーを扱うにしても、新たな肖像の創造ではなく、ダムの精密な調査結果の提示自体が「根拠を問わないままに伝承されてきた表象や解釈に対して訂正の働きをなしているのである。」

研究者という閉じられた集団の専門用語を駆使するのではなく、一般読者の誰もが理解できるような平易な言葉で描く—それはまた、ダムの自作朗読会が各地で人気を博していることが示すように、彼女の肉声をとおして、彼女が調べ上げた事実の魅力が、聴衆に、連れ立ってWanderungに参加する者たちに、共感となって直接伝わっていくのである。こう述べてジムは、メーリケ賞を受賞したさいのダムの謝辞、詩人メーリケが身をおいた孤独の賛美から引用して、こう締めくくる。「この静けさこそ、さまざまな出会い、すなわち自然、人間、歴史、そして自分自身との出会いが可能となる状況であり」、そのことをダムの著作は私たちに教えてくれるのである。

ジム編集長はこう述べたあと、次の言葉で祝辞を結んだ。「ご清聴ありがとうございました。ジークリット・ダム様、チューリンゲン文学賞の受賞、心からお祝い申し上げます。このたびの受賞は、ダム氏の著作の出版を手掛けております当社にとりまして、まこと大きな名誉とするところでございます。」

## II



演説するC.O.コンラーディ名誉教授

カール・オットー・コンラーディ、ケルン大学名誉教授の賞賛の演説は、「文学的証拠探索の旅。ジークリット・ダムの作品によせて」と題するもので、この著名なゲーテ学者がはたしてどのようなことを述べるのか、興味津々、いささか緊張したが、講演の内容に触れるまえに、ゲーテを取り巻く研究状況と氏の業績を概観しておこう。

マティアス・ルゼルケは「ゲーテ年1999」を回顧して、ゲーテの商品化がゲーテ・グッズにとどまらず、全集や関連書の刊行など広く出版界にも及んだとし、こうした社会現象に潜むゲーテ崇拜の起源について通説の19世紀を否定、じつは生前中の18世紀、友人たちが産婆役であったと述べている<sup>8)</sup>。しかし起源はどうあれ、確かなのは、死後シラーとともにドイツ国民文化の代表者とされ、とくに後者は1871年帝国成立後、ゲーテ崇拜 (Goethe-Kult) という形で広くイメージが定着、「詩聖」「オリンポス神」とし

て今日にまで及んでいることである。無論、この間、批判や忌避も起こるが大勢は変わらず、1960年代になってやっと脱神話化の動きが顕著になる。フリーデントールが清新な筆致で人間ゲーテを描出、80年代のマンデルコウやコンラーディの事実重視のゲーテ論へと受け継がれる<sup>9)</sup>。この関連で、いわば周辺研究と言ってよい労作も現われるのである。すなわち、ゲーテ神話の森の中に棄てられてきたレンツやコルネリアなどの弱者の生涯を発掘、検証、再構築して、ゲーテのありのままを示したダムの一連の伝記的作品。あるいは、ゲーテと出版者の関係に焦点を当て、出版者との人間関係を焙り出したウンゼルトの『ゲーテと出版者』<sup>10)</sup> などである。

大著『ゲーテ。生涯と作品』<sup>11)</sup>の著者コンラーディ教授は、周辺研究とはいえ、大きくは脱神話化という自分と同方向にあるダムの仕事をどう捉えているのか、この点は私にとってひじょうに興味深いことであった。「証拠探索 (Spurensuche)」—コンラーディ教授は題名にも掲げたこの特徴こそ、ダムの作家としての仕事、彼女の意図と実践を要約するものである、と話し始めた。

Spurensucheにliterarische (文学的、文学的手法としての) という規定語を冠することが許

ジークリット・ダム、チューリンゲン文学賞を受賞する

されるかと思えます。と申しますのも、今日の視点と、調査により確認された過去の事柄との結合は、言語化に成功してはじめて実現し、過去をたどることは同時に現代をたどることになるのです。そのうえ、古文書館に眠っている記録書類は検討整理、再調査、説明を必要としております。そして、記録書類に解説が加えられ、文学的宇宙に変換させられてはじめて、調査されたものが生命をおびて、追体験の可能な現実が生じてくるのです。

そう語り始めたコンラーディ教授は、ダムの作品はこのような「文学的証拠探索 (literarische Spurensuche)」の成果であるとして、1970年イェーナで学位を取得、研究者としての道を歩み始めたダムがDDR時代の閉塞した状況下、アカデミズムの世界から身を退いて、いかに作家として転身していったか、「ドキュメントに即して物語る (dokumentarisches Erzählen)」<sup>12)</sup> という独自の手法をいかに体得していったか、をたどってゆく。

アカデミズムから作家という自由業への転身—ダムに決意させたのは、DDRにおける公式的な「歴史」とその下でほとんど存在を喪失している「個人」の関係、そしてアルヒーフ (公文書館、文書館) に保存された史料における両者の逆転の関係であった。

あらゆる矛盾から清められ、変革や対立もなかったかのごとく扱い、ただ勝利という一点に向かって上昇する直線—それが、私が体験した歴史でありました…(略)…イデオロギーにすっぽり覆われた国家においては、ドキュメントが、アルヒーフに保存されたものが、真実を見失わないための、たしかな事実立脚するための、最後の頼みの綱であると思われました。「幻想を促進する嘘」という餌を過剰に与えられておりましたので、かえって「記録に即したもの」、つまりアルヒーフに保存されているものへの渴望が目覚めました。歴史が中断され、停止しているという痛感が、歴史への欲求をかきたてたのです。この欲求とはすなわち歴史を再生することによって個人を取り戻すことでありました<sup>13)</sup>。

「私の人生において、アルヒーフに対する私の関心と作家活動の開始の時期とは一致しています。つまり、アルヒーフへの私の愛は、大学でゲルマニスティクを専攻したせいでも、学究出身という身の上のせいでもありません。それは、そもそも記述されたDDRないし東側の世界に固有な歴史体験と結びついているのです。」こうして1978年、38歳の年がダムにとって転機となる。引用した発言自体は壁崩壊後の1992年のものであるが、まだDDR下であった時期にすでに示されていたダムの体制批判の視点、大学を辞して自由業への道を踏み出したダムの果敢さをコンラーディ教授は賛嘆しつつ、この出発にあたって彼女が選んだヤーコプ・ミヒャエル・ラインホルト・レンツとの関係に話を進めていく。才能ありながら挫折した詩人レンツ、友人ゲーテにより国外追放に処されて生涯放浪を続けた者、歴史から消された者。最初ダムは文学者として『レンツ著作・書簡集』(全3巻)の編纂に携わるのだが、そのなかで人間レンツと出会い、共感をもって彼の伝記の記述に心を奪われていく。

人間とは、人工の小さな機械、共和国というものの隙間に押し込まれた一個の歯車にすぎない。そこでしばらくがくがく回転し、まだ十分動けたとしても、磨り減ってしまったとして、ま

た新しい歯車にあとを譲らなければならない。しかし、それが本当に生きたということになるだろうか。<sup>14)</sup>

まるで啓示のような働きをしたレンツのこの言葉。「私は当時これと同じように感じていました。私は全体の一部に組み込まれようとしていたのですが、もはやこれ以上部品ではありたくなかったのです。」そして、このレンツの生涯の探究はすぐ同類の存在であるコルネリア・ゲーテの、さらにヴァイマル宮廷社会で日陰者扱いにされたクリスティアーネ・ヴルピウス、クリスティアーネ・フォン・ゲーテの生涯の探究へと続いていく。

コンラーディ教授は「証拠探索」と「ドキュメントに即して物語る」というダムの特徴を作品に即して触れつつ、さらに、手に入れたドキュメントの扱い方、ジグソーパズルのように復元していくさいのピースの欠けた箇所での処理の仕方、ピース（証拠資料）が見つからない箇所があると、「私たちにはわからない」と調査の限界を率直に告げる一方、疑問が生じた箇所ではその疑問を告げて自問し、答えを出そうとすることによりおのずと対話の形が生まれ、その対話に読者を引き込んでゆく独特の手法について解説してゆく。その一例として、コンラーディ教授は『クリスティアーネとゲーテ』の次の箇所を朗読した。2箇所省略してではあったが。

今日の医学知識に照らせば、クリスティアーネ・フォン・ゲーテの死因は腎機能不全による尿毒症であった。激痛は凄まじいものであったにちがいない。私は医者や薬局の請求書を探した。クリスティアーネがどんな治療を受けたのか、証拠になるものがほしかったのである…(略)…無駄であった。唯一、息子のアウグストがデンシュテット夫人に支払った金額をしるしたものだけが残されていた。「病臥中の母に対する…(略)…看護代として」となっている。ゲーテの記録にしるされている医者の往診は二回だけである…(略)…臨終を看取ったのは誰だったのか。兄の妻、下っ端の女優や看護婦などの女たち、それに息子のアウグスト。彼はいたのだろうか。—私たちにはわからないのである。(504頁)

さらにコンラーディ教授は単語の羅列、主語や述部を欠いた文肢だけによるダム独特の文体に話を進め、その一例として最新作『シラーの生涯』から朗読したが、ここではもう取り上げない。私が興味を掻き立てられたのは、そのあと彼がダムの卓抜したSpurensucheの成果として実例を二つ挙げ、まず『クリスティアーネとゲーテ』の中でダムが言及している「子殺し」について述べたことであった。ヴァイマルにおいて1783年4月に発生、同年11月28日に死刑が執行されたヨハンナ・カタリーナ・ヘーンの事件である。これまでのゲーテ伝では詳細は何ひとつしるされていないことを不思議に思ったダムは、この事件の経緯を調べ上げ、委曲をつくして説明しているのである。カール・アウグスト公は死刑判決を承認し死刑執行の命令書に署名するのをためらう。子殺しが死刑で対応しなければならない問題である、という確信がもてなかったのである。そこで公は枢密顧問官たちに意見を求めるのだが、ゲーテはなかなか意思表示をしない。だが、せつつかれた彼は、1783年11月4日短い意見書をしたためて提出する。「愚見でも死刑を保持したほうが得策である」と考えます。

私たちは『ファウスト』のグレートヒェンのことを知っている。1772年1月14日、フランクフ



ジークリット・ダム、チューリンゲン文学賞を受賞する

ルトのゲーテの生家からさほど遠くない刑場で執行された子殺し犯スザンナ・マルガレーテ・ブランドに対する斬首刑。ちょうどゲーテが駆け出しの弁護士であった頃で、この事件の衝撃があの悲しくも美しいグレートヒェン悲劇のモチーフとなったのである。私生児を生むことに対する社会の指弾を恐れるあまり、わが子を手にかけてしまったマルガレーテ。斬首の刑を受けて罪を償わなければならない。法の非情さ、理不尽さを批判する側にあったはずの詩人ゲーテが、いまや死刑を支持する役人に変貌している。ダムは「言語道断の判断である」と言い、こう問う。「こう断言した彼は、その後いったどのように生きていったのか。私は彼の当時の手紙や日記を読み返してみた。一行のメモも注記もないのである。」(82頁)

ダムのこの指摘に、みずからも大著『ゲーテ。生涯と作品』を書いているコンラーディ教授は、ゲーテの『国務上の著作』でこの件を読んで知ってはいたが特に注意を払わなかった、と言って、率直に不明を恥じる。2004年には同件の資料を収集したリュウディガー・ショルツ『ヨハンナ・カタリーナ・ヘーンの短い生涯。カール・アウグストとゲーテのヴァイマルにおける子殺しと子殺し犯』<sup>15)</sup>が出て、広く世間の知るところとなり、ゲーテの死刑執行への関与における「責任」の議論がさまざまな立場からなされるに至る。無論、ダムの問題提起の成果であり、私たちは氏に感謝しなければならない<sup>16)</sup>。しかし私がこの問題との関連でとりわけ苛立たしくなるのは、と言って、コンラーディ教授が持ち出したのは、ダムも触れている問題、1783年11月、自分が加担したはずの死刑執行がなされた同じ時期に、ゲーテが『ティーフルト・ジャーナル』にあの有名な詩「神性 (Das Göttliche)」を発表しているという事実である。「人間は高貴であれ／人を助ける心をもち善であれ！ (Edel sei der Mensch, / Hilfsreich und gut!)」人口に膾炙するこの詩句、ゲーテのヒューマンイズムの証としてもはやされる詩句である。いったいこれが彼の死刑執行是認といかに調和するのだろうか。コンラーディ教授はこう問いかけて、私たちはゲーテの意図を再検討しなければならないとして、さまざまな可能性を挙げる。ゲーテにとって「密かな自己免罪」「カール・アウグスト公に建議しなければならないと考えた結論に対する罪の赦し」、あるいは全く逆にこの詩の第8節が明言しているように、「善人に報い、／悪人を罰し／癒し救い、／迷い彷徨するすべてのものを／有用に結びあわす (Den Guten lohnen, / Den Bösen strafen, / Heilen und retten, / Alles Irrende, Schweifende / Nützlich verbinden)」、その権利を人間は有しているのだ、ということの正当化の宣言。1783年11月の残酷な措置について、伝えられる資料や著作の中には、確かにゲーテの発言は一言もない。ヴァイマルのエアフルト門の外側にあった刑場でヨハンナ・カタリーナ・ヘーンの斬首刑が執行された当日、グレートヒェン悲劇のあの詩人はいったいどこにいたのか。コンラーディ教授はこう述べて、ダムの文章を朗読、あらためてこの問題の考察を聴衆に促したのであった。

1783年11月28日。<sup>マルクトプラッツ</sup>市の立つ広場には大勢の市民が集まって待っている。子殺し犯ヨハンナ・カタリーナ・ヘーンは屠畜運搬車の藁の上に座っている。付き添う二人の聖職者。

斬首刑用の板の足場が組み立てられる。ヘーンの罪の告白。

そのあと群集はエアフルト門の方に移動する。

軽騎兵連隊の兵士100名。処刑の瞬間が延びるほど、その場の緊張が、恐怖の効果が高まってゆく。

振り下ろされる剣。(92頁)

埋没して忘れ去られてしまった事柄、等閑視されてきた事柄に注目し、資料発掘によって光を当てていくダムの調査能力は確かに驚嘆に値する。と同時に、男性にはない確かな目線の特記してもよい。コンラーディ教授がダムの卓抜したSpurensucheの証として挙げた第2の実例は、クリスティアーネの日記の調査と編纂である。クリスティアーネ没後百周年に当たる1916年、ハンス・ゲルハルト・グレーフは『ゲーテと妻の往復書簡集』<sup>17)</sup>を編纂刊行するのだが、その中で彼は次のように報告した。ゲーテの死後の書齋には、16折り判の『決定版全集』と『ゲーテ=シラー往復書簡集』の間に挟まれて、黄色く変色した包紙につつまれたゴータ式書き込みカレンダーの3年分が置かれていて、これにはクリスティアーネの日記がしるされていた、というのである。だが、「この報告を再調査した人は誰もいない。」この間、およそ80年もの歳月が経っているのである。文学研究における研究者の関心の違い、偏った価値評価、つまり日常生活等閑視の態度は明白としか言いようがない。几帳面な父カスバルが付けていた家計簿から、忘却の淵に沈んだコルネリアを救い出して真の姿を描き上げたように、グレーフの報告に着目し、現物に当たって調査し、クリスティアーネの日記として編纂、注釈を施していったダム。それが他の追隨をゆるさない作品『クリスティアーネとゲーテ』となって結実したのである。

誰もがつい看過しがちな「日々の生活をしるす人間的なものに愛情をもって目を向けていく—そこに読者は心惹かれるのであり、また偉大な人物に対する証拠探索者としてのダムの姿勢にモットーとして適うものがあるとすれば、ペーター・デ・メンデルスゾーンのあの美しい言葉〈敬意は可、恭順は否〉であろう」と述べ、果敢な作家活動ゆえの受賞を祝福し、今後のさらなる活躍を祈念し、晩年のゲーテがドルンブルクで自然と人間の関わりを詠った詩を朗詠して、コンラーディ教授は賞賛の演説を結んだ。

ドイツの教授たちの講義や講演における話術はまことに巧みでいつも感心させられるが、コンラーディ教授の演説もまさしく音吐朗々、ここでは口調や身振りなどを文字で再現できないのが残念でならない。授賞式終了後のパーティーでダム氏を囲む席に同席して、コンラーディ教授からお話をうかがえたのは、私にとって望外の喜びであった。

### III

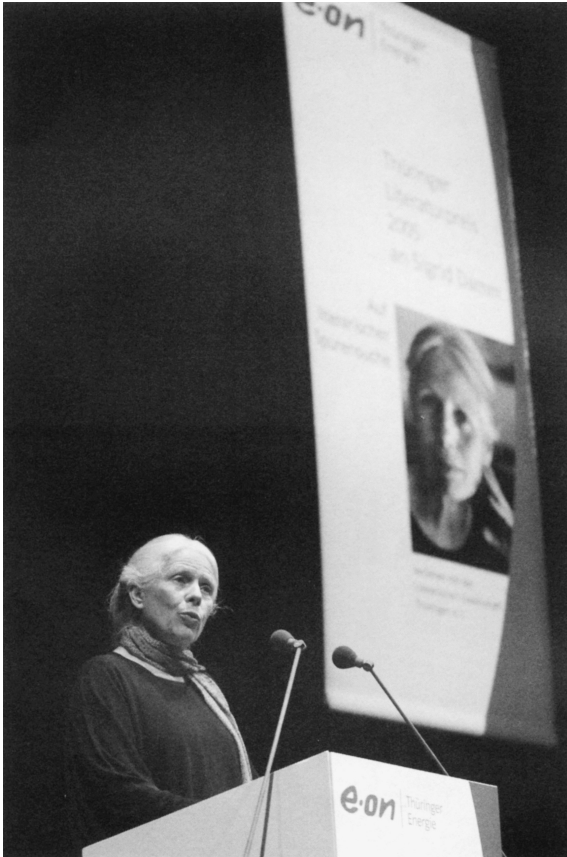
首相閣下！ご来場の皆さん！

ただいま私に寄せられました温かいお言葉の数々に対しまして、また、チューリンゲン文学賞を私にお認めくださったチューリンゲン文芸協会に対しまして、心より厚くお礼申し上げます。

チューリンゲン。

カリフォルニアのある1軒の家、その屋根の上に二人の男が立って、太平洋を眺めておりました。一人が東を指差して、向こうが西だ、と言う。東に西があるだって？言い争いになって、口角沫を飛ばすありさま。とうとう家の主人が仲裁に割って入り、まずあなた方のいる位置を決めてはどうですか、そうでないと方位は正確に定められませんよ、と意見したのです。結局、遠い

ジークリット・ダム、チューリンゲン文学賞を受賞する



謝辞を述べるジークリット・ダム

アメリカ大陸で、西の方位とされたのはチューリンゲン州エアフルトでした。

あの軽妙な散文集、早世したラインハルト・レタウ<sup>18)</sup>の『方位の問題のために』の中に出てくるお話です。レタウはチューリンゲン州エアフルトに生まれ育ちましたが、学生紛争の頃、ドイツ連邦共和国から追放されました。

私が彼に出会ったのは1990年—彼は壁の崩壊後の変化を自分の目で確かめたくなくて、久しぶりに故国に舞い戻っていたのですが—私たちはなんの前置きもなく、そもそも自己紹介もないまま、テーブル越しに思いつくかぎりの地名を大声で言い合ったのです。ピッシュレーベン、ギスペルスレーベン、ノイディーテンドルフ、ファーネルシェ・ハーエン、エッターズベルク、ヴァンデルスレーベン、オスマンシュテット、ドライ・グライヒエン、シュタイガーヴァルト等など…。

同席していたロルフ・ホーフとギュンター・デ・プロインは驚き、二人

とも頭がすこし変になったのではという目つきで私たちを見ていたのですが、それも当然、レタウと私はもうやめられなくなって、大声で言い続ける。次つぎに新しい町村名や地名が思い浮かんできて、私たちの勝負はつきそうにもありません。けれども式辞が始まって、とうとう中止しなければならなくなったとき、私たちはすでに友情で結ばれておりました。

いまなお私はこの時の無邪気な喜びの爆発を思い出します。気持ちが一つになった私たちは、故郷チューリンゲンの町村を、地誌を作成するみたいに測量して回り、地図作成者のようにたがいに大声で確認し合って、私たちが生まれ育った土地を地図に記入していったのでした。そこに、よそ者にはおよそ理解できないような親近感が生じたのです。

同郷であることの親しみ、郷愁、幼年時代の記憶にすぎなかったのか、それともそれ以上のものだったのか。

私にとってチューリンゲンとは何であるのか。チューリンゲンに私は生れ、育ち、チューリンゲンの大学に学び、結婚して最初の子供を出産したのもチューリンゲンでした。ゴータ、イエーナ、ザールフェルト。しかし、これら私が住んだ都市も、そこに精神的風土を培う可能性がなかったならば、なんら重要な意味をもたず、自伝というカプセルの中に浮遊するだけにすぎなかったのではないのか。精神的風土—それはチューリンゲンには特別強い形で現われているので

はないか。他に見られないほど高低の落差の、あまりにも大きな刺激的な思想空間。そして、地図上にしるされた赤い点のように際立つ都市がヴァイマルなのではないでしょうか。

幼年時代に私がたどったヴァイマルへの道は、天国に通ずるものではありませんでした。私が五つか六つの頃、大人たちの会話にまるで亡霊のように姿を現していたのは、人間の皮膚で作ったランプのシェードの話でした。およそ信じられない、ありえない、といった口調で、その中にイルゼ・コッホという名前が出てきました。そして、次の話になると、ほとんど攻撃的な語調でした。1945年アメリカ軍によってヴァイマル市民はエッタースベルク山上に「追い上げられた」一家畜を山上に「追い上げる (hochtreiben)」という言葉が用いられました—、女性たち、とりわけ若い女性たちはブーヘンヴァルトで起こった出来事について何も知らなかった可能性もあるにもかかわらず、あの蛮行の現場をじかに見るように強制されたのです。

人間の皮膚。イルゼ・コッホという名前。エッタースベルクへの行進。

お気に入りの場所の裁縫台の下に座って聞いていた私は尋ねた。「いったいそこで何があったの？」

大人たちは驚いて話を中断、私は室外に追い出された。おまえはまだ小さすぎる、まず大人にならなければね、と。

拒絶されたことによる反発でかえって好奇心が目覚め、この時から私は終戦時32歳だったまだ若い母親に手を引かれて、エッタースベルクへと行列にまじって行進する自分の姿を見てきました。今でもこのイメージは私の心にあります。

私は周囲の身近な大人にはもはや尋ねませんでした。しかし、のちにラジオや学校で聞いたこと、新聞や書物で読んで知った一切のことを、それがどこで起こったにせよ、私はこのブーヘンヴァルトに組み入れてゆきました。アンネ・フランク、ルーブリン、テレージエンシュタットやシュトゥートホーフの子供たちのことを。行列の行進はけっして終わりませんでした。子供の信仰は一途そのもの、私はすべての公式報道を心に刻んでゆきました。

ところでこの信仰にもひびが入ってしまいました。ワルシャワ・ゲッターのドキュメント『炎に包まれて滅ぶ』によって引き起こされたものでした。アルノルト・ツヴァイクが編纂した本で、その序文もしたため、日付を1958年9月15日とするしております。この日、21カ国が参加して盛大な式典が、すなわちフリッツ・クレーマーがブーヘンヴァルト強制収容所のために製作した記念碑の除幕式が行なわれたのです。ツヴァイクは、この1958年9月15日が「ユダヤ歴の新年5719年と交差したこと」を「じつに不思議な偶然」であると言い、こう断言しました。「いまエッタースベルクに掲げられた21カ国の国旗のなかには… (略) …ファシズムのテロの犠牲となったユダヤ人たちを代表する太古の象徴、ダビデの星の旗がない。」そして彼は序文を次の言葉で締めくくったのです。「ここに、この本のなかに、それ (=ユダヤの旗) は赤い旗と並んではためいている。」

ユダヤ人？ これについて公式発表をいろいろ探してみましたが、無駄でした。私は父に聞いてみました。何度も。父は死の直前になってから—すでに90歳を越えていましたが—、こちらが尋ねもしないのに、突然おおよそ20人ぐらいの、ゴータ市に住んでいたユダヤ人の氏名を空で

ジークリット・ダム、チューリンゲン文学賞を受賞する

言ったのです。ユダヤ人たちの商店の名前、住んでいた通り、番地、そして彼らが移住していった国々の名前へと続き、中斷することなく、まるで長いあいだ記憶していたことをすべて残らず伝えなければならないという様子でした。

ユダヤ人とブーヘンヴァルト。ホルヘ・センブルン<sup>19)</sup>。18歳のときこの収容所送りとなり、生還した彼は、以来、この問題と取り組んでおります。そして、ケルテース・イムレ<sup>20)</sup>もまた同様に。フレート・ヴァンダー<sup>21)</sup>の『第七の泉』を読んで、私は深く感動しました。母にプレゼントしたのですが、母は返してよこしました。本の舞台はゴータ近郊のオーアドルフにあったブーヘンヴァルト強制収容所の支所でした。オーアドルフは、戦中戦後の食糧難の時代に、母が危険をおかしつつ懸命になって、私や妹のために小麦粉を求めて農家を回った所だったのです。母はナチ時代に政治活動は行わず、またドイツ女子青年同盟 (BDM) への加入も拒否したのですが、その母が私のプレゼントを突っ返してきたのは、たまたま同じ場所であったことが暗に同罪者という非難、と感じたからなのではないでしょうか。

事実、そうであったのかもしれませんが。両親が口をつぐみ続けるほど、私のイライラは募りました。私のほうはすべてを終わった後から見ていたわけですが、母のほうは12年に及ぶナチ独裁下の日々の生活を生き抜いてきたのですから。この日常生活の現実が公然とテーマとして取り上げられるまでには、ヴィクトル・クレンペラーの『日記』(1995)の出版に見られるとおり、ほとんど50年の歳月がかかりました。いまなお私は恥じ入って自問するのですが、私のあのイライラもひょっとすると、私もまた一幼かったので母と同じではないにせよ—ナチ独裁下に育っただけに、私の思考にもその影響が刻み込まれているのではないか、という事実と無関係ではないのかもしれませんが。

この問題が明確に識別され、感覚的に理解できるようになったのは、これまたヴァイマルがその舞台でありました。と申しましても、ヴァイマル古典の高みがそれを成し遂げてくれたわけはありません。

子供の頃の私にとって、ゲーテやシラーは打てば響くような格言の師でした。どんな機会にもうってつけの言葉が見つかり、彼らの著作はまさに箴言の索引カード箱であったのです。学校の遠足でゲーテ・ハウスやシラー・ハウスや大公霊廟を見学しました。イエーナ大学時代には「青少年ヴァイマルの日」のための実習に参加しました。もっとも、あちこち見学して回るの是一案内人付き見学そのものも—私は好きでしたが、しかしそうしたことはありません。

それは、「国際大学夏期講座」<sup>22)</sup>でありました。この時、ヴァイマルは世界に向かって大きく扉を開いたのです。ヴァイマルにおける夏休みのこの4週間。それは、大学生として、その後は大学のスタッフとして数年参加したのですが、私にとってじつに意味のある幸せな体験でした。

14カ国以上の国々からの参加者。外国でドイツ語教育に当たっている大学の講師や教授、高校などの教師たちのための教授法養成講座でしたが、西側の諸国からは教員のほかに学生でも参加できました。

この集まりでなされた論争は、私がかつて体験したことのないような率直なものでした。党の路線に沿った議論ではなく、人生というものの指針に沿った議論であったからです。誇りに膨らんだDDRの胸は急速にしぼんでゆき、また美しい兄弟国像にも汚れが生じました。

私は多くのことが知りたくてたまらず、内々での対話も何度も行ないました。イルム河畔の散歩を思い出します。レニングラードから来たユーリ・カツは大ロシア人たちの好戦性について、ソビエト連邦のユダヤ人たちが曝されている抑圧の状況について、話してくれました。ポーランド人女性から聞いた自国の話も同じようなもので、スコピエから来たイリーナからは、ユーゴスラビア国粋主義や国家崩壊の兆しについて聞かされました。

これらは初期の兆候と言ってよく、私にとって日常生活における細部ながら、つねに逆鉤さかさかぎのように公的な組織に刺さり込んで、組織を穴だらけにしてゆきました。

しかし、同時に、映像で見た西側諸国の現実そのものも輝きを失ってゆきました。私は毎晩部屋で夜を徹してなされた論争を思い出します。フランス人、イタリア人、イギリス人そして私、4人の若い女性でした。西では職業に就きながら子育てをするために途方もない苦労があるという。キャリアか子供かという二者択一。この時の議論のお蔭で私は、DDRの終焉まで育児と職業の両方を結びつける可能性を、この小さな国家における私にとっての本質的な生きる価値と見なすことができたのです。この確信はいまも変わりません。

その後、ベルリンに住んで仕事をするようになってからも、私はこの夏期講座に心惹かれました。私は毎年2日間ヴァイマルに行き、DDR文学について講演を行ないました。いつも二人の息子連れて行きました。息子たちはこの講座の中心人物であったエルフリーデ・ベツナーのところで遊ぶか、博物館へ行って、あとで私に見てきたゲーテ愛用のスプーン、グラスや乗用馬車について報告するのです。

1978年は私の人生の転機となりました。大胆にも自由業への転身を企てたのです。「共和国というものの隙間に押し込まれた1個の歯車のような働き」を、私はもはやしたくなかったのです。

フランツ・フューマンは教えてくれました。「ライオンの心臓を食べても勇気が得られるわけではない、勇気とは、他者の辛酸あまをともに嘗めてこそ得られるものなのである。

レンツ、コルネリア、クリスティアーネの辛酸を私はともに嘗めました。私にとってこれらの人物は一私に授与された文学賞の選考委員会の公式見解が言うように―「惑星の周囲をまわる衛星の一群」ではけっしてなく、どんな時にも私にとっての関心事は彼ら自身の人間性でした。巧みに権力と折り合いをつけて光を浴びている人間よりも、適応能力のない人間、「切り抜けていく能力をもたない存在」に私は魅せられたのです。

ところで、ヴァイマルという精神風土は、文学の上でも、政治の上でも、さまざまな人間の運命がセンセーショナルなほど交差する場所です。ゲーテは政界入りし、みずからの「文学的人生」をレンツに委ねました。衝突が起こり、一方の生命線は下降をたどり、彼の人生は挫折しました。今日になってもなお痛ましい損失です。友人が友人を遠ざける。レンツは「反逆者、浮浪者、誹謗文の作者」としてヴァイマルから追放されました。この一件は不可解なヴェールに包まれております。

死後に遺された手書原稿を開いてみても何ひとつ解明されません。

ジークリット・ダム、チューリンゲン文学賞を受賞する

しかし、ヴァイマルの自筆原稿を保管しているアルヒーフ。仕事にとってはまさに新たな次元、私は興奮し、調査に調査を重ねましたが、いくつかの偶然に恵まれたものの、なんら成果はなく終わりました。レンツの調査にさいして私は44箱の自筆原稿に出会いましたが、その中にはゲーテ家の家計簿もありました。これがのちに『クリスティアーネとゲーテ』執筆のための資料調査にとって重要な意味をもつことになるのです。チューリンゲン国立中央公文書館にはクリスティアーネの父親の資料がありました。古い教会戸籍簿。1996年私はヴァイマル古典財団から3ヶ月の奨学金をもらい当市に滞在しました。ベルバデーレ城の庭師用の宿舎、その中の小さな部屋を与えられ、他に二人の奨学生も住んでおりました。毎朝、私はリュックサックにコンピュータを入れて市内まで徒歩で通いました。イルム河畔の公園、シュランゲンシュタイン、公園の草地を通して。そして夕刻、同じ道を通して宿舎に戻りました。精神が集中し、幸せな仕事が出来ました。

それから北欧の地スウェーデンの、北極圏の近くにある息子の木造の家で、私は執筆にとりかかりました。

心はまだヴァイマルの地にあるのに、足では歩いております。最初は想念の中だけの話でしたが、やがて現実となって、極圏の広大な自然の中を歩き回ったのです。山から戻ってきた息子の話、彼が撮った写真、グラフィックアート、コラージュの魅力。孤独からくるエネルギー。

上の息子ヨアヒム・ハムスター・ダムは舞台芸術家、写真家、パフォーマンス・アーティスト、そして下の息子トビアス・ダムはグラフィック、ビデオ、インターネットの分野で活動しておりますが、この二人の息子との共著として『ラップランド昼夜紀行日記』が生れたのです。

それから再びチューリンゲンになります。私はシラーの生涯を徒歩で踏破しようと企てました。シラーは書いています。彼は息子のために「チューリンゲンよりも良い祖国」を「手に入れてやる」ことを願ってシュヴァーベンに旅立つのですが、結局は戻って来ます。「ヴァイマルで生涯を終えるつもりはない。」1804年にそう言っております。「どこへ行っても、当地よりはましき。」彼はベルリンに行き、戻って来ます。プロイセンよりチューリンゲンを選んだのです。「辺鄙で静かな」ヴァイマルが彼の生きる地となり、また骨を埋める地ともなったのです。

ゲーテは晩年親友の死について言います。「シラーはまさに時宜を得てこの世を去って行った。」この発言は1806年の、あの歴史的転換点を暗に指しているのでしょうか。そうに違いありません。

けれども、それ以上のことを言っているのです。シラーは名声の絶頂期に倒れ、死によってかえって人気がいや増しました。その反対にゲーテは親友の死のあと生きた27年間、幾多の激しい攻撃に身を曝すことになります。世間では、ゲーテをシラーと争わせてうまい汁を吸おうとする傾向が増大してゆきます。

ハインリヒ・ハイネは「シラーのためにゲーテを軽んずることほど愚かなことはない」と言っております。

そして、この問題に関して自分の考え方を述べております。「行為は言葉が産む子供であるの

だが、しかしゲーテの言葉は子供を産まず…(略)…シラーの言葉のように行為となって実ることではない。」

「シラーは革命という大きな理念のために書き、未来への愛を語ることで生涯を終えた…(略)…彼みずからがあのポーサ侯爵なのであり、預言者にして軍人、みずから予言するためにみずから戦い、スペインの外套を着てはいるが、その下で脈打つのは、かつて愛し苦しんだドイツのもっとも美しい心なのである。」

1830年の7月パリ革命の希望に夢中になったハイネは、そう言っているのです。「そしてドイツは？」と彼は問います。「ついに我々は、いまこそ我々の檜の森を使う絶好の時ではないのか、つまり世界を解放するためのバリケードとして。」

ゲーテはどう考えていたか。「樹齢何百年もの檜の木を自由の木として、ましてやバリケードなどに使うことはできない。この木は、その梢に赤い帽子をかぶらせ、その下でカルマニョールを歌って踊るためには、高すぎる。」

のちに自由への陶醉が幻滅に終わったとき、ハイネの姿勢は変わってゆき、彼はゲーテを擁護し、「ゲーテの人生享楽の、あの威厳のある態度は、悟りの境地にある神々のもとにのみ見られるものである」と言って、ゲーテの中に、病んで分裂した時代におけるヘレニズム的なものの体現を見るのです。

ゲーテもまた、19世紀という新世紀を一その開始時にシラーは「時宜を得てこの世を去って行った」のですが一病的で、分裂した時代と見ておりました。

人は、この世に生を享けるにあたって、時と場所を選択できるでしょうか。それは私たちにしても同じ、誰にもできないことなのです。私たちは私たちの時代に結び付けられております。つまり、現代は私たちの生涯であると同時に歴史の一部なのです。

ケルテース・イムレは、1980年フラウエンブラーンのゲーテ・ハウスを訪ねたとき、こう書き留めております。「ただ〈ここ〉、そして〈あの時代〉においてのみ〈彼〉はありえたのだ」とし、それから古典主義の定義を述べるのですが、この定義ほど私を納得させるものはありません。「非生産的な現代に対して生産的な方法で背を向けること、それがドイツ古典主義である。」

ハンガリー人のケルテース・イムレは14歳でアウシュヴィッツに送られたあと、ブーヘンヴァルト強制収容所に収容されるのですが、からくも生還、1980年に行なったあのドイツ=チューリンゲン旅行(ヴァイマル=アイゼナハーナウムブルク=ヴァイマル、と『ガレー船日記』と名付けた日記の中にするしております)の途上、彼もまた再びこの現場に戻っております。

彼は収容所を訪れるのですが、「ブーヘンヴァルトについて長編を書いたにもかかわらず…(略)…ブーヘンヴァルトがもはやなんの意味をもっていない、という奇妙な、メランコリックな事実」に直面して動揺するのです。

にわか雨に遭って、彼と同伴の女性は、他の人たちと一緒に近くの建物に雨宿りに駆け込みます。それはほかでもない「火葬場」だったのです。なんとも言えない、堪えがたい状況です。ケルテース・イムレは書いております。「私はその時どんなに願ったことか。私が私でなく、彼女が彼女でなく、何も起こらず、歴史も存在せず、たまたまここに集まった私たち全員が歴史と無関係の人間であることを、一リルケに倣えば一時を超越した神々であることを。」



ジークリット・ダム、チューリンゲン文学賞を受賞する

他の箇所では彼は記憶をたどっております。1945年早春、アメリカ軍によってブーヘンヴァルト強制収容所が解放された直後のこと、病棟バラックの前で憔悴しきって毛布にくるまり、ポータブルトイレに座り、そこから眺めていたということです。市内からエッターズベルクへと登って来たヴァイマル市民の行列がちょうど到着して、現場のあまりの恐ろしさに立ち止まった瞬間の光景を。

事件と回想の間にはすでに半世紀の時間が経っております。「だが、私はこの光景をどうしたらいいのか」とケルテース・イムレは自問しております。「そう望むなら、この光景は倫理的判決と捉えるのにうってつけである。それはしかし、この光景の真実ではない。こみ上げる怒りは省察の産物、つまり、わざとらしい感情にすぎない。あの本来の、瞬間に対するはるかに鋭敏な感覚を消し去るのに役立つにすぎない。芸術はしかし…(略)…人間に有罪の判決を下すためにあるのではなく、生のこの一瞬を新たに創造するためにあるのだ。」素晴らしい作家にして人間であるケルテース・イムレの言葉ですが、私はもう一度彼のこの言葉を繰り返して、本日賜わった栄誉に対する私の謝辞とさせていただきます。「芸術はしかし…(略)…人間に有罪の判決を下すためにあるのではなく、生のこの一瞬を新たに創造するためにあるのだ。」

## おわりに

ドイツには各州各都市に大小さまざまな文学賞があるが、ゲーテやシラーなど多くの作家が活躍した由緒あるチューリンゲンも、壁の崩壊後15年余りの希望と苦しみを経、ようやく誇ることの出来る文学賞を有する州となったのである。しかし、チューリンゲン文学賞の賞金が6千ユーロ(約90万円)と聞くと、ゲーテ時代と同じくヴァイマル、チューリンゲンが、いまなおきわめて儉しい経済状況にある現実に驚かされる。ちなみに同年のゲオルク・ビューヒナー賞(Georg Büchner-Preis)の受賞者ブリギッテ・クローナウアー(Britte Kronauer)は、約6倍半の4万ユーロを獲得している。受賞者に一流作家が名を連ねるドイツ語圏最高の文学賞であるにしても、実質的にこの賞を支えている豊かなヘッセン州の経済力を抜きにしては考えられない。

最後にダムの主な文学賞の受賞歴を見ておくと、リオン・フォイトヴァンガー賞(Lion-Feuchtwanger-Preis)(1987)、モーリケ賞(Mörrike-Preis)(1994)、テオドール・フォンターネ賞(Theodor Fontane-Preis)(1994)を経て、今回のチューリンゲン文学賞となる。ダムの全著作に対する顕彰とされるが、コンラーディ教授も言うように、とりわけ『クリスティアーネとゲーテ』および最新作『フリードリヒ・シラーの生涯』の評価の比重が大きかったと思われる。ちなみに、前者は異例のベストセラーとなってすでに60万部が売れ、後者もまた好評を博し、上々の売行きと聞く。前章で見たとおり、「謝辞」の中で、故郷チューリンゲンについて、生い立ちの記憶の中におけるブーヘンヴァルト強制収容所の存在について、率直な言葉で語り、同収容所からの生還者ケルテース・イムレの、この忌まわしい現場を再訪したさいの感慨にみずからの思いを重ね合わせたダム。人間はこの世に生を享けるさい、時と場所を選ぶことは出来ない。現代、すなわち私たちが生きるこの時代も、過去の歴史と無関係な時間ではけっしてない。ナチ

ス・ドイツ下の1940年ゴータに生れ、敗戦4年後のDDR建国時わずか9歳、人生のもっとも多感な時期を社会主義建設期の東ドイツとともに生きた彼女にとっても、ドイツ=ヨーロッパ史におけるあの暗黒の時代は避けて通ることのできない問題であり、これを見据えた新たな作品が期待されるのである。無論、ケルテース・イムレが言うように、ドイツ人も私たちも新たな変容に向

かっている。そして、「芸術は…(略)…人間に有罪の判決を下すためにあるのではなく、生のこの一瞬を新たに創造するためにある」のだとしても。



ヨアヒム・ハムスター・ダム(左)とトビアス・ダム(右)  
ヴァイマル、ドイツ国立劇場の前で母ジークリット・ダムと

私がジークリット・ダムと友情を結んで早や10年、今回の授賞式において氏がよく話題にする二人の子息にも会うことができたのは大きな喜びであった。謝辞の中でもそれとなく触れているように、離婚後引き取って女手一つで育て上げた息子たちである。家庭と職業を両立させた

という氏の誇り。二人はそれぞれ得意の芸術の分野で活躍し、『ラップランド昼夜紀行日記』の著者名に母親と一緒に名を連ねる。資料の整理やコンピュータによるデータ処理など、母の執筆活動にも助力を惜しまないと聞く。授賞式会場でも左右に座って母親をしっかりとガードしていた。じつに頼もしい青年たちで、二人がついている限りダムの新たな創造への可能性はまだまだ大きいものがある。それゆえ、私は次作にいっそう大きな期待を寄せ、最後には必ずやゲオルク・ビューヒナー賞受賞を、と願っているのである。

#### 注

本稿は、2005年11月6日授賞式に出席したさいのメモにもとづいて書き始められたが、後日、当日の祝辞・講演などをまとめたインゼル社刊の小冊子が送られてきたので、それにより再確認し、加筆、訂正したものである。Verleihung des Thüringer Literaturpreis an Sigrid Damm. Deutsches Nationaltheater Weimar, 6. November 2005. Frankfurt am Main, 2005. この小冊子からの引用には、必要と思われるものに限って注を付した。なお、本稿のごく概略(「はじめに」と「おわりに」の部分)を日本ゲーテ協会刊『ゲーテ年鑑』第48巻「日本版」の「情報サイト」にも掲載したことをお断りしておきたい。

- 1) 注4参照。
- 2) 注4参照。
- 3) Siegfried Unseld(1924-2002)。1959年創業者ペーター・ズーアカンプの死とともに34歳の若さで同書店の社主となり、69年インゼル書店を併合、現代文学のズーアカンプ、古典文学のインゼル、として相互補完の体制を整えた大出版社に発展させる。20世紀ドイツの最大の出版者。注10も参照。
- 4) ダムの主要著作の原題と出版地および出版年は次のとおり。

\* *Begegnung mit Caroline. Briefe der Caroline Schlegel-Schelling*. Hrsg., mit einem Essay. Leipzig

ジークリット・ダム、チューリンゲン文学賞を受賞する

- 1979.
- \* *Vögel, die verkünden Land. Das Leben des Jacob Michael Reinhold Lenz.* Biographie. Berlin und Weimar 1985. Frankfurt am Main 1989, 1992 als Inselfaschenbuch.
  - \* *Jacob Michael Reinhold Lenz. Werke und Briefe in drei Bänden.* Hrsg., Leipzig 1987.
  - \* *Ich bin nicht Ottilie.* Roman. Frankfurt am Main 1992.
  - \* *Diese Einsamkeit ohne Überfluss.* Prosa. Frankfurt am Main 1995.
  - \* *Die schönsten Liebesgedichte.* (Hrsg.) Frankfurt am Main 1996.
  - \* *Caroline Schlegel-Schelling. Die Kunst zu leben.* (Hrsg.) Frankfurt am Main 1997.
  - \* *Christiane und Goethe. Eine Recherche.* Frankfurt am Main und Leipzig 1998.
  - \* *Tage- und Nächtebücher aus Lappland.* Frankfurt am Main und Leipzig 2002.
  - \* *Das Leben des Friedrich Schiller. Eine Wanderung.* Frankfurt am Main und Leipzig 2004.
- 5) 1945年東西ドイツ分裂によってインゼル社も東西2社に分かれたが、その後も密接な関係を保持、再統一後の1991年再び1社に統合され、ライプツィヒのインゼル社は同社の支店となった。なお、1963年ズーアカンプ社がインゼル社を併合、ウンゼルトが両社の社主となっていた。
  - 6) Damm, Sigrid: *Christiane und Goethe*, S. 30. 以下、同書からの引用は直後に頁数をしるすだけにする。
  - 7) Damm, Sigrid: Der Kopiastift hinter dem Ohr des Soldaten. Vortrag in Weimar 1992 zur internationalen Konferenz der Archive. In: *Literaturarchiv und Literaturforschung.* Hrsg. von Christoph König und Siegfried Seifert, München/New Providence/London/Paris 1996, S. 34.
  - 8) Luserke, Matthias: *Goethe nach 1999. Positionen und Perspektiven.* Göttingen 2001, S. 133-143.
  - 9) Friedenthal, Richard: *Goethe. Sein Leben und seine Zeit*, München 1963. 邦訳: 平野雅史他『ゲーテ—その生涯と時代』(上下巻) 講談社、1979年。Mandelkow, Karl Robert: *Goethe in Deutschland.* 1980/89. Conrady, Carl Otto: *Goethe. Leben und Werk*, 1982/85. なお、Goethe-Kultについては次の書を参照: *Metzler Goethe Lexikon.* Hrsg. von Benedikt Jeßing, Bernd Lutz und Inge Wild. Stuttgart und Weimar 1999.
  - 10) Unseld, Siegfried: *Goethe und seine Verleger*, Zweite, revidierte Auflage. Frankfurt am Main und Leipzig 1993. 邦訳: 西山力也他『ゲーテと出版者—一つの書籍出版文化史』法政大学出版局 2005年。
  - 11) 注9参照。
  - 12) コンラーディ教授は1998年10月7日ND (Das Neue Deutschland) 紙に掲載されたKlaus Bellinの書評から引用している。
  - 13) Der Kopierstift hinter dem Ohr des Soldaten, S. 3f.
  - 14) インタビューにおけるダムの発言。Bohn, Angelika: Wer war diese Frau? In: *"Journal"* Die Ostthüringer Zeitung zum Wochenende, 29. August 1998.
  - 15) Scholz, Rüdiger: *Das kurze Leben der Johanna Catharina Höhn. Kindermorde und Kindesmörderinnen im Weimar Carl Augusts und Goethes*, Würzburg 2004.
  - 16) ゲーテの死刑執行承認の件については、Günter Jerouschekが「Skandal um Goethe?」と題して反論を展開している。Vgl. *Goethe-Jahrbuch* 2004, Bd. 121, Weimar 2004, S. 253.
  - 17) *Goethes Briefwechsel mit seiner Frau.* Hrsg. von Hans Gerhard Gräf. Frankfurt am Main 1916.
  - 18) Reinhard Lettau (1929–1996)。1950年の半ばアメリカ合衆国に移住、作家となり、1967年以降はカルフォルニア大学教授としてドイツ文学を講ずる。
  - 19) Jorge Semprun (1923–)。スペインの作家、政治家。1943年亡命先のパリでゲシュタポに逮捕されブーヘンヴァルト強制収容所に送られる。生還したあと執筆活動を続け、1988年文部大臣、1995年ヴァイマル賞受賞。
  - 20) Kertész Imre (1929–) ユダヤ系ハンガリー人。作家。2002年ノーベル文学賞受賞。第二次世界大戦中アウシュヴィッツおよびブーヘンヴァルト強制収容所を体験。

- 21) Fred Wander (1917-) ウィーン生まれの作家。ユダヤ人として1942-1945年アウシュヴィッツおよびブーヘンヴァルト強制収容所を体験。1955年妻とともに東独に移住、1988年ウィーンに戻る。
- 22) Die Internationalen Hochschulferienkurse. 1988年私も学会の推薦によりライプツィヒ大学（当時はカール・マルクス大学）で開催されたこの講習会に参加した。私がジークリット・ダムと出会ったのは1996年、在外研修でヴァイマルに滞在していたときであるが、氏との接点の可能性がここにもあったのかと思うと感慨無量のものがある。
- 23) Imre, Kertész: Das unsichtbare Weimar. In: *Merian*, Weimar, 1996, S. 108.